

平成 30 年度白滝ジオパーク研究助成報告書

東北大学大学院文学研究科 博士後期課程
青木要祐

研究課題名「遠軽町タチカルシュナイ第Ⅱ遺跡における後期旧石器時代人類活動の復元」

1. 現状と課題

遠軽町タチカルシュナイ遺跡群は 1958 年以来、60 年間で 12 次にわたる発掘調査が行われ、北海道の旧石器時代及び縄文時代草創期研究において著名であるとともに近年再び注目を集めている遺跡群である。しかしながら、1950～70 年代に行われた調査に関しては、調査の記録・資料の情報が十分に公開されておらず、遺跡群の現代的意義が不明確であった。これを受けて筆者は平成 29 年度白滝ジオパーク研究助成の支援を頂き、調査記録の精査、出土遺物の確認等を行った。その結果、遺跡群の一部であるタチカルシュナイ第Ⅱ遺跡（以下、T-II 遺跡とする）では、特に貴重な資料が多く出土していることが確認された。この成果の一部は北海道旧石器文化研究会 2017 年度定例研究会で発表するとともに、『北海道考古学』第 54 輯にて報告している。研究会では、道内外の研究者から多くの意見・質問を頂き、遺跡群、特に T-II 遺跡出土資料に高い関心が寄せられていることを実感した。しかし、昨年度は遺跡群全体の調査を行ったため、T-II 遺跡については出土資料の半数が未整理のままであり、遺跡内でどの時期にどのような人類活動が行われていたのかは未だ不明であった。

2. 目的とねらい

本研究では、1971 年 T-II 遺跡出土資料から指標的遺物（細石刃核・有舌尖頭器など）を抽出し、遺跡を残した人類集団ないしその所属時期について把握することと、一部の遺物について顕微鏡観察を行い、遺跡内で行われた人類活動の一端の復元を試みることを目的とした。

本研究で扱う T-II 遺跡はこれまでほとんど整理されてこなかったが、今日では道内外の研究者から関心を集めている。本研究でその内容・所属時期を明らかにすることにより、新たな発掘調査を行うことなく基礎資料の蓄積がなされ、研究・議論の対象とすることができる。また詳細は後述するが、本遺跡からは細石刃核甲板面の擦痕付与に使用されたと考えられる作業面再生剥片が確認されている。他遺跡では確認されていない事例であり、未だ肉眼観察しか行っていないため今後の検証が必要であった。本研究において顕微鏡観察を行ってより厳密に検討することにより、細石刃製作技術の研究に大きく貢献できる。

3. 方法

本研究では、Ⅰ) 器種分類及び指標的遺物の抽出、Ⅱ) 出土遺物の顕微鏡観察を行った。Ⅰ) 遠軽町埋蔵文化財センターに収蔵されている T-II 遺跡出土遺物の器種分類を行った。概報（吉崎 1972）では剥片が 76,351 点、ツール類が 8,662 点出土したとされ、このほか

に出土した碎片を合わせた総点数は 10 万点を上回るとされる。今回は厳密な遺物組成の把握を目的とせず、指標的遺物の抽出を目的とした。そのため、剥片・碎片類の分類は行わず、過去にツール類と分類されたもののみを対象とした。

II) 申請者が昨年度実施した資料調査にて、白滝型細石刃核に接合する作業面再生剥片の中に、腹面バルブ部から基部にかけてつぶれがみられる資料が確認できた。細石刃核甲板面に擦痕を施すために使用されたものと推定しているが、あくまで肉眼観察と接合という状況証拠によるものである。そのため顕微鏡観察を行い、細石刃核甲板面の擦痕との類似性を確認する。

遺物にみられる微細痕跡の観察・記録にあたっては、デジタルマイクロスコープ (KEYENCE、VHX-1000) を使用した。

4. 研究の成果

研究の成果の一部はすでに学会発表を行っているが、未報告のものが多く、これから論文等として公開を目指しているため、ここでは一部についてのみ記述する。ご了承願いたい。

I) タチカルシュナイ第 II 遺跡の所属時期

過去にツール類とされたもののうち、これまでに約 8,000 点の分類を終えた。残りの約 500 点については来年度以降に継続して調査する計画である。

分類の結果、白滝型細石刃核が 11 点確認できたほか、峠下型・ホロカ型細石刃核も数点ずつ確認できた。札滑型細石刃核は確認できていないが、札滑型細石刃核製作の際に剥離されたと考えられるファーストスポール・スキー状スポールが確認できた。これらは、後期旧石器時代後半期に指標的な遺物である。そのほか、縄文時代草創期に属する可能性ある石器も確認された。近隣では T-II 遺跡と同遺跡群内に存在するタチカルシュナイ遺跡 M-I 地点にて、縄文時代草創期と想定される石器群が近年確認されており、関連性もうかがえる。

このことから、T-II 遺跡は後期旧石器時代後半期を中心として利用され、縄文時代草創期にも利用された可能性が考えられる。

II) 細石刃製作関連資料の微細痕跡観察

出土資料からは、細石刃製作に関わる接合資料が複数確認できた。以下では、1 組の細石刃製作に関わる接合資料に注目し、微細痕跡の観察結果を記述する。

i) 接合資料の概要 (図 1)

黒曜石製の白滝型細石刃核と作業面再生剥片の接合資料である。作業面再生剥片は左側面に 3 条の細石刃剥離面を残す。細石刃核の甲板面と作業面再生剥片の打面の高さはほぼ同じであることから、後者の剥離後に新たなスポール剥離はなされず、約 30 mm 離れた両者間で細石刃剥離が行われたものと考えられる。その後、細石刃核の作業面にステップが生じたことが廃棄の要因と推測される。

ii) 白滝型細石刃核 (図 2-A)

甲板面の作業面側から中ほどにかけて、擦痕がみられる。擦痕は太さ 0.1 mm ほどの太い線

状痕からなり、1本の線状痕は連続するC字状の痕跡から構成される(図2-B)。太い線状痕であることから、岩石など比較的固い物質との接触によって生じたものと理解できる。

太い線状痕の向きは甲板面の長軸方向と平行であり、それを構成するC字状の痕跡は一方方向だけでなく逆向きのものも含むことから、擦痕を生じた運動は甲板面の長軸方向と平行に往復する動きであったと考えられる。

iii) 作業面再生剥片(図3-A)

腹面バルブ部及びバルブ横の左側縁、リップ直下の部分につぶれがみられる。これらはいずれも0.1mm前後の非常に太い線状痕の密集からなり、C字状の痕跡で構成されている(図3-B 下半)。打面には擦痕がみられる。これらも太さ0.1mmほどで、石器長軸と垂直、すなわち剥離前の段階では細石刃核甲板面長軸と平行方向の線状痕が密集したもので、連続するC字状の痕跡で構成される。打面と腹面がなす縁辺では、打面の擦痕とリップ下のつぶれ、それぞれの線状痕が切り合っており、リップ下つぶれの線状痕が打面擦痕の線状痕よりも新しいことがうかがえる(図3-B 上半)。

腹面のつぶれ及び打面擦痕にみられる線状痕はその方向から、それぞれ往復運動によるものと考えられる。また非常に太い線状痕であるため、岩石など比較的固い物質との接触によるものと推測される。これらの位置関係や切り合いを踏まえると、打面に擦痕が施され、剥離された後に腹面を中心に何らかの用途に使用されたものと考えられる。また、腹面のつぶれは、長軸と直交方向及び斜行方向の線状痕から構成されるが、混在せずにそれぞれまとまりをもって分布するため、接触部位・保持角度を変えて二度使用されたものと推測される。

iv) 小結

細石刃核と、それに接合する作業面再生剥片にみられた微細痕跡の顕微鏡観察を行った。その結果、これらはいずれもC字状の痕跡の列からなる太い線状痕であり、線状痕の太さや特徴が類似していることが分かった。また、今回取り上げなかったスキー状スポールでも作業面再生剥片にみられたようなつぶれが確認できている。

細石刃核甲板面の擦痕と各資料のつぶれが非常に類似する痕跡であること、それらの接合関係及び線状痕の新旧関係を踏まえると、今回取り上げたスキー状スポール及び作業面再生剥片は、細石刃核甲板面の擦痕を施すために使用された可能性が高いと考えられる。

5. まとめ

本研究ではタチカルシュナイ第II遺跡出土資料の分類・分析から、同遺跡は後期旧石器時代後半期を中心として利用され、縄文時代草創期にも利用された可能性があることを明らかにし、そのうち後期旧石器時代後半期の白滝型細石刃石器群の中で行われた細石刃製作活動の様子を明らかにした。当初の計画の中で年度中に完了しなかった部分に関しては、今後遂行していく計画である。

なお、本研究の成果の一部は2018年度日本旧石器学会にて発表を行ったほか、2019年度中に論文投稿を予定している。

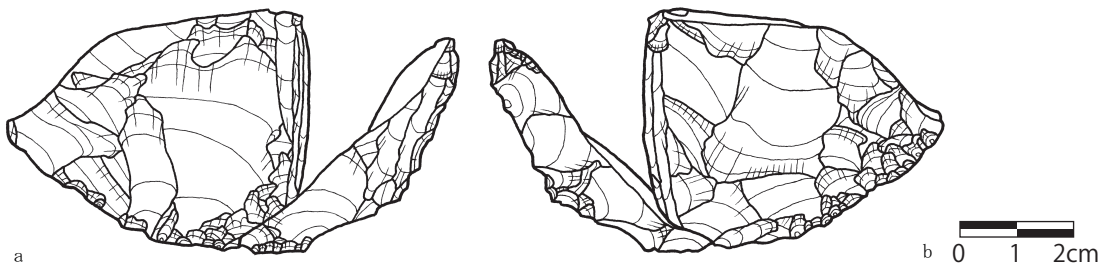
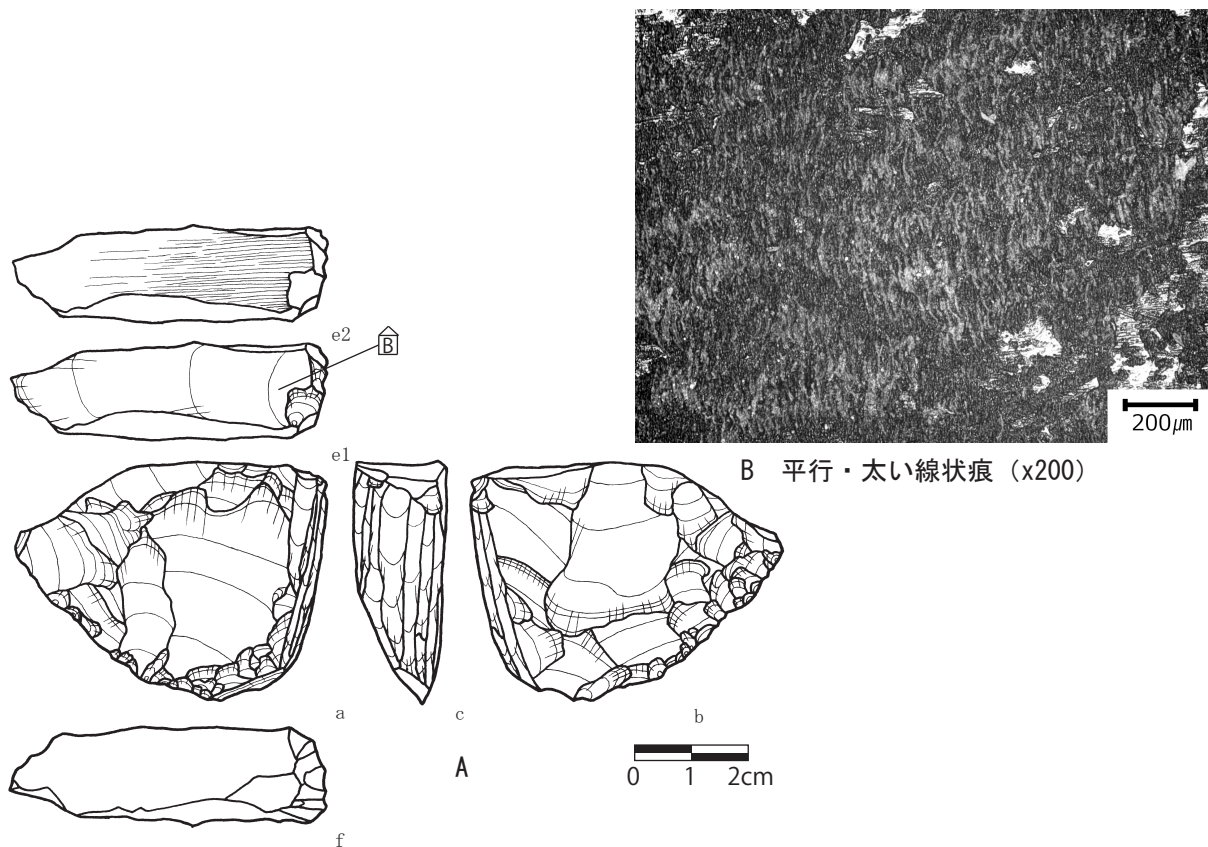
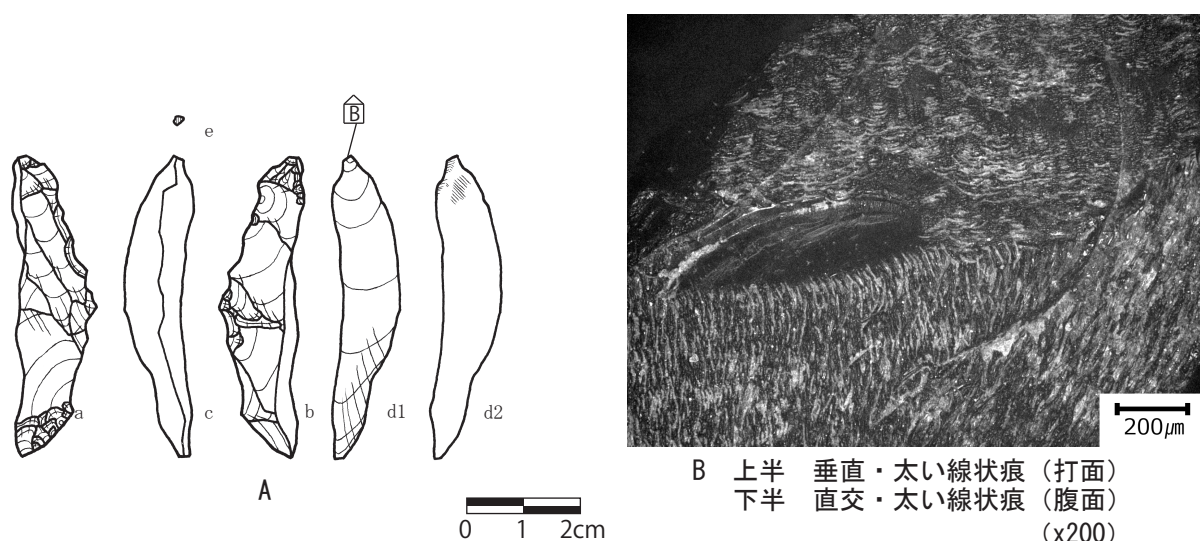


図1 タチカルシュナイ第Ⅱ遺跡出土接合資料



B 平行・太い線状痕 (x200)

図2 タチカルシュナイ第Ⅱ遺跡出土白滝型細石刃核



B 上半 垂直・太い線状痕 (打面)
 下半 直交・太い線状痕 (腹面)
 (x200)

図3 タチカルシュナイ第Ⅱ遺跡出土作業面再生剥片